

---

# それでも世界は止まらない

かーばんくる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それでも世界は止まらない

### 【Nコード】

N3507BA

### 【作者名】

かーばんくる

### 【あらすじ】

世界は昔、遙か太古からその歩みを止めてきた。そしてそれは現代でもそうだ。誰にも気付かれることの無く世界は何度もその歩みを停止していた。

そしてそんな世界に巻き込まれてしまった少年が一人。  
そしてそんな世界に慣れてしまった少年が一人。

止まってしまった世界をテーマに書いた小説です。

良かった読んでください。

## 序章（前書き）

はじめまして、カーばんくるです。

今回は序章で短いですがぜひ読んでください

## 序章

世界は何度も動きを止めてきた。何故だかは分からない。

それでもその動きを止めてきた。昔、それもはるか太古から。

誰もそれに気付くものはいない。

それでも極稀にその止まった世界に入り込んでしまう人がいる。

決まって五人、それ以上もそれ以下も無く、決まって五人。

止まってしまった世界では誰も死ぬことは無い、老いすらもない。  
だが言い換えれば死ぬことが出来ない。

その五人は止まった世界から戻ってくる事も出来ず世間的には家出、  
行方不明として処理される。

それでも五人は止まってしまった世界から抜け出す事を夢見ている。

## 第一章（前書き）

連続投稿です

## 第一章

「はい、ここは大切な所だからノートに写しておくように、後で提出してもらってからな」

いつもと変わらない風景、いつもと変わらないクラスメイト、いつもと変わらない退屈な授業。

眩暈がする。ああ、これは前兆だな。もうすぐこの『いつも』は崩れる。

ほら、五秒前、四秒前、三、二、一。

カウントが零になると同時に世界が色あせて、モノクロへとなっていく。

そして目に見える全てのものが動きをとめた。

板書をする教師、退屈そうに頬杖をつく生徒、真面目にノートをとる生徒、窓の外で風に揺られていた木の葉、飛び立とうと翼を広げた小鳥、その全てが模型のようにぴたりとその動作を停止した。

それと同時に授業を説明する教師の声、窓の外で選挙運動をする声、かすかな機械音でさえも、その全ての音が消え失せた。

「久しぶりだな、一年ぶり位か」

全てのものが動きをとめ、ありとあらゆる音が消え去ったこのモノクロの世界でただ一人動いている少年がいた。

その少年は特に驚く様子も無く、モノクロの世界を見回した。

この止まった世界で唯一動ける少年、志野廉しのれんはつまらなさそうに鞆から一冊の文庫本を取り出し、読み始めた。

廉にとってこの異常な光景は別に珍しいものではなかった。今まで何度も体験した事のある光景だった。

廉が初めてこれを体験したのは小学五年生の時だった。

その時は今と同じ授業中だった。唐突に眩暈を感じ、廉は思わず目を閉じてしまった。

数秒後眩暈は収まり、廉は目を開いた、そしてその目の前に広がるあまりにも異常な光景に廉は言葉を失った。

全てのものが色あせ、全ての音が消え去り、そして全てのものがその動作を停止していた。

「なんだよ……これ」

友人も、先生も全ての人が動かない

「なあ、おい、なんか言えよ、動けよ、動いてくれよ」

自分の前に座る友人の肩を掴み思いつきり前後に揺する。しかし友人は表情を変えることの無く虚空を見つめていた。

廉は徐々にパニックに陥っていく。

「頼むから、動いてくれえ！」

さらに強く揺すったが友人それでも全く表情を変えずに虚空を見つめ続けていた。

「先生、先生、答えてください、何なんですか、これは、答えて、答えてよお！」

板書をしている恰好から全く動かない教師も廉の言葉に答えることをせずに、その視線は黒板へと固定されていた。

「なんなんだよ！ほんとにどうなってんだよ！これは」

もしかしたら他のところは普通かもしれない。

そんな希望を持って廉は教室を飛び出した。

「助けて、みんなが変なんだ」

隣のクラスの教室の戸を開き叫びながら教室に飛び込んだ廉が見たものは、自分のクラスと同じ状態の教師、それに生徒達だった。

「なんで？ こども？」

何で、どうして、とふらふらと教室をよろめきながら出ながら廉は呟いた。

「一体どうしてこんなことに……」

廉は次の教室のドアを開けた。しかし、そこも自分の教室と全く同じ状態だった。

その次も、そのまた次の教室もすべて同じ状態だった。

「なんで、こんな事おかしい、どうしてこんなことになったんだよ」  
混乱する思考の末に廉の目からは涙が溢れた。

「……そうだ、大人なら、先生なら何とかしてくれるかも知れない」  
職員室、あそこなら先生がいる。頬を伝う涙を乱暴に拭い廉は廊下を駆け出した。

大人なら、大人ならきつとなんとかしてくれる。そう、大人ならまだ子供だった廉の瞳には、自分に出来ない事が出来る大人は不可能な事の無い完璧で絶対的な存在のように写っていた。

息を切らし、足に疲労がたまる。それでもこの状況をどうにか打開したくて、その一心で職員室へと急ぐ。

ようやくの思いで辿り着いた職員室の扉がまるで希望の象徴のように見えた廉は泣き笑いのような表情を浮かべた。

これで、これで元に戻る、と。

「先生、大変なんです。助けてください、みんなが、おかしいんです」

勢いよく職員室の扉を開き、中にいる教師に助けを求めた。

しかし、その言葉の途中で廉は異変に気付いた。

誰も、こつちを見ない？

「先生、聞いてますか？ 聞こえてますか？ 先生！」

教師達は誰一人として微動だにしない。

「先生、先生！ お願いです、助けてください！ お願いです、動いて、助けて！ 何か言つて！」

廉は涙を流しながら、叫ぶ様に懇願した。それでも教師は誰も廉に視線を向けずに、言葉一つ返さない。

？だ、先生まで、大人なのに、大人ならなんとかしてくれるって、そう思ったのに。

廉は足から力が抜け、そのまま床に座り込んでしまった。

一体、どうすれば、どうすれば元に戻るんだ……。誰か助けて。

涙で滲む視界に一つの機械が目に入った。電話だ。

そうだ、警察なら、警察なら何とかしてくれるかもしれない。

廉は力の抜けた足を叱咤し立ち上がり電話へと手を伸ばした。  
1、1、0、とゆっくり番号を入れて行く。

しかし、職員室の電話からは全く何の反応も返ってこなかった。いくらボタンを押そうとも全く何の反応も返ってこない。

「何で？ どうして？ 電話が使えない？ どうして、警察に、大人に知らせなきゃダメなのに。どうしてだよ！」

学校の外なら、外なら普通かも知れない、いつも通りなのかも、外に居る大人の人に助けてもらおう。

廉は職員室から飛び出し、外を目指して駆け出した。

誰か、誰か、助けて！

廉のそんな願いも儂く、外も学校の中と変わらず目に見えるモノ全てが止まっていた。

赤信号でもないのに道路で停止する車、歩道で片足を上げたまま停止する人々。

商店街には楽しそうな表情で談笑をする主婦の姿があつたが、よく見たらその口は全く動いておらず、表情も全く動かない。

「誰か、誰か助けてください！ 誰か、いませんか、誰か動ける人はいないんですか！」

廉は力の限り叫び、止まった人々の間を走り抜けた。

誰か、誰か、動ける人は？

「交番、交番なら警察の人がいるはず」

廉は商店街を抜けた先にある交番を目指した。

しばらく走り続けようやく見えた交番へと廉は転がり込んだ。

「お巡りさん、助けて下さい、学校が、町がおかしいんで……す？」

廉はすぐそばにあつた交番の壁に背中を預けた。

廉の目の前にあるのは仕事なのか書類に何かを書き込んでいる警官の姿だった。しかし、開いたまま全く動かない口を見ればその警官も例外無く動けない事が分かる。

警察もダメ？ じゃあ、一体どうしたら、分からない、どうしたら、

もしかしたらもうずっとこのまま？

絶対に認めたくない可能性を思い浮かべ廉はさらなるパニックに陥った。

いやだ、そんな事絶対にいやだよ、誰か、誰か助けてよ。

廉はまるで夢遊病のようにふらふらと歩きだした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3507ba/>

---

それでも世界は止まらない

2012年1月9日01時52分発行